東洋史研究
第七十七巻　第四號　平成三十一年三月發行

近代中國における肺結核の問題化

瞿　艶　丹

目次

はじめに
第一章　清末時期から北京政府時期まで（一一九二七）
一　通俗醫學書の登場
二　醫學統計データの活用
第二章　南京國民政府時期（一九二八―一九三七）
一　防癆救國の宣傳
二　東亞病夫と肺結核
第三章　日中戰爭期及び戰後の言論（一九三八―一九四九）
おわりに

はじめに

近代以降、醫療・衛生事業の展開が様々な地域における統治機構再編の契機となり、社會制度の變容に大きな影響を與えた。多くの研究がすでに指摘してきたように、急性傳染病の流行は歴史に多大な影響を及ぼすものであり、中國史研究においてはペスト・天然痘・コレラなどの急性傳染病が最も注目されてきた。[1]

當時死亡率・感染率ともに高かった肺結核は、ペスト・天然痘・コレラなどの急性傳染病と異なり、感染範圍が極めて廣く、潛伏期間も長いため、發病過程も様々であり、老若男女を問わず誰もが罹患する可能性があった。それ故に、通俗出版物や新聞廣告などの重要な主題ともなった。『申報』データベースを檢索してみると、肺結核・肺癆・肺病の記事と廣告の件數はペスト・天然痘・コレラ・猩紅熱・腸チフス・マラリアなどの疾病よりも多い。[2][3]

近年の中國の醫學書を開いてみると、肺結核の歴史を紹介する際に以下のような記述が多々見られ、これがごく一般的な認識であることがわかる。

中華人民共和國成立以前、中國人は外國列强に「東亞病夫」と貶められた。このような蔑稱は根據もなくあてられたわけではなく、當時中國國內では肺結核が非常に深刻な形で蔓延しており、政府が效果的に防止し、コントロールすることもできず、死亡率は極めて高かったからである。癆病〔肺結核〕はかつて死亡の代名詞になっていた。[4]

そこで問題となるのは、近代中國における肺結核の蔓延という問題と、肺結核と東亞病夫の結びつきについての認識がどのように形成されたのか、という點である。

一九三五年十月、上海社會衛生叢書編集部は郭人驥の『實驗圖解癆病救星』という著書を出版した。卷頭には褚民誼が書いた「起衰振國」という題字があり、二十篇の序文が載せられている（うち、自序一篇も含まれる）。序文の作者はほとんどが上海を中心とした地域の肺結核專門醫や肺結核に關心を抱く醫者であるため、當時の醫學者がどのように肺結核を

認識したかをある程度推察できるだろう。まず、多くの序文は中國の肺結核の驚くべき死亡率や感染率に言及し、これは國家の存亡に關わる恐怖の疾病であると指摘した。例えば、杭州西湖醫院院長楊郁生は次のように述べた。

中國防癆協會の調査によると、この病氣のために命を失う者は、毎年約百六十萬人いる。各衞生機關の報告によれば、この病氣の患者は、十萬人あたり四千人である。我が國の人口を四億と計算すれば、全國に千六百萬の肺結核患者がいる。彼らは隔離療養をしようとせず、次々と傳染するため、肺結核患者は年々增えている。[5] 我が民族は帝國主義の進攻を待たず、すでに自ら衰弱・危亡な恐怖の境地に陷っている。

そのほか、肺結核を東亞病夫と明確に結びつけた序文は四篇ある。これらの序文は、肺結核にかかる者が最も多いため、中國は東亞病夫と呼ばれるが、この著書で紹介した肺結核防止法・治療法を學び、肺結核による死亡率を減らして、東亞病夫の恥を雪ぐべきだと述べている。[6] また、別の序文は、この著書は「一般の書賈の投機的かつ利益を求める書」と異なると指摘した。[7] 上海市教育局はこの本を高く評價し、肺結核についての知識を普及させるため、市内各小中學校及び圖書館にこの書籍を購入するように命じた。[8]

つまり、一九三〇年代半ばの時點で、中國において肺結核流行の恐ろしさ、肺結核と東亞病夫の結びつきについての認識は、上海の各界ですでに定着していた。肺結核を主題とした書籍は多く出版され、さらには「投機的かつ利益を求める書」までも出されていたことがわかる。そこで東亞病夫がいかにして肺結核と結びついたかという問題と關わって以下の點が問題となる。政治家・醫者・知識人・言論人たちがしばしば引用した中國肺結核死亡率が何に由來するものなのか。肺結核に關する知識を傳播する際に、出版物はどのような役割を果たしたのか。こうした疾病認識は、どのように近代中國社會に定着していったのか。また、時代の變化によって、肺結核をめぐる社會的な認識はいかに變化を起こしたのか。

近代中國肺結核に關する主な先行研究には以下のものがある。ブライディ・J・アンドリューズ（Bridie J. Andrews）は肺結核という概念および細菌學が中國で受け入れられた過程を分析した。[9] 雷祥麟は肺結核を中國的な衞生論と密接に關聯

する疾病として檢討した。[10] また、衞生と身體や政治との密接な關係に注目し、防癆運動と新生活運動には「衞生習慣」により個人を改造し、中國の家庭を衞生の敵と見なすという共通點があると指摘した。[11] 文學研究の分野では、文學作品において語られた肺結核のイメージに關する研究も見られる。[12] いずれの研究も肺結核が近代中國における重大問題であると認識しているが、肺結核がどのようにして重大問題となったかについては明らかにしていない。

以上の問題意識から、本稿は近代中國において肺結核が問題化され東亜病夫と結びつけられる過程を分析する。

第一章では清末から北京政府時期にかけての肺結核に關する知識の傳播・受容を取り上げ、通俗醫學書の果たした役割を考察する。なかでも丁福保が翻譯・編纂した「丁氏醫學叢書」に着目する。さらに、上海工部局の統計データを分析し、多數引用され、あるいは語られてきた肺結核死亡率の由來を明らかにする。後述するように、こうした數値は全國を對象とした調査によって得られたものではなく、またその正確性に問題はあったものの、肺結核が問題化される際に決定的な作用を及ぼしたからである。[13] 第二章では、防癆と救國との關係、肺結核と東亜病夫との結びつきを解明する。第三章では、日中戰爭期及び戰後における肺結核をめぐる言論の特徴に着目し、南京國民政府時期の肺結核に關する認識の變遷を分析する。

本論に入る前に、本稿が檢討する地域について簡單に說明する。上海は近代中國において新思想が最も發展した地域であり、また新聞メディアや出版業が最も發達した地域でもあり、各界の人士が言論の舞臺として重視した地域でもある。くわえて、上海には多くの開業醫が存在しており、數多くの團體を結成し、豐富な資料を殘した。このような狀況の中で、上海は近代中國における肺結核に對する認識の形成をリードし、肺結核を問題化するに當たって、重要な役割を擔った。故に、本稿は上海を主な對象地域として檢討する。ただ、協和醫學院が所在していた北京、上海の周邊地域、日中戰爭の時期に國民政府が所在していた重慶などの地域も視野に入れたい。また、本稿で使用する通俗醫學書は、中國各地の圖書館（特に上海圖書館）が所藏しているものや筆者が獨自に蒐集したものである。

第一章　清末時期から北京政府時期まで（一一九二七）

一　通俗肺結核醫學書の登場

肺結核は前近代の中國では「癆病」「肺癆」、あるいは「虚勞」「志勞」「心勞」「癆瘵」「骨蒸」「傳屍」などと呼ばれた。[14] 四大難病「風癆臌膈」の一つとされ、古代より中國の醫者たちが關心をもち、專門の醫書が蓄積されてきたが、その解釋や治療法は時代や醫者によって様々であった。[15] 西洋の肺結核についての知識は、早くも一八四〇年代には宣教師が翻譯した醫學書を通じて中國へと傳わり、その多くはすぐに日本に輸出され、翻刻された。[16] 明治政府が醫制改革を進めるとともに、こうした時代遅れの醫學書は次第に日本の市場から淘汰されていき、新たに西洋の醫學書が日本語に翻譯され、西洋醫學體系のもとで教育された日本人醫師たちの著作が廣まった。他の數多くの語彙と同じように、「肺結核」(tuberculosis) という言葉も間違いなく日本人醫師が翻譯したものである。[17] 近代の中國語メディアにおいて、この語彙が初めて登場するのは、おそらく『亞東時報』の記事だと思われ、[18] その後『申報』にも轉載された。

十九世紀末から、中國では日本の醫學書が翻譯され始め、また大量の日本の通俗醫學書が中國に輸入されて翻譯・出版され、肺結核に關する書籍は相當な量があった。その中で特に注目すべき書籍は、丁福保が編纂・翻譯した「丁氏醫學叢書」である。この叢書は長期間にわたり版を重ねており、發行部數も非常に多かった。近代中國における肺結核に對する認識の變化を考察する際に、これらの通俗書の影響は看過できない。本節では「丁氏醫學叢書」を中心として、肺結核についての知識が近代中國でどのように廣がっていったのかを檢討する。

同治十三年（一八七四）、丁福保は江蘇無錫に生まれた。しかし彼は科學試驗が廢止されるまでのわずかな餘光に間に合うことなく、無錫縣學の生員にとどまった。[19] これにより、彼の交遊ネットワークが大きく制限されたのみならず、彼の生

涯の事業も影響を蒙った。[20] 彼は早い時期に日本の書籍を翻譯・出版する仕事に注目し、よく本屋に赴き日本と關係ある書籍を購入し、[21] 親友と翻譯・出版の仕事について相談した。[22] 光緒二十七年（一九〇一）、彼は東吳大學に入學する。同年四月五日、在北京日本公使館で翻譯事務に從事し、言論界で活躍していた小村俊三郎と出會い、小村から日本の書籍を中國で翻印したらどうかというアドバイスをもらった。[23] 翌年、丁福保は同鄉の兪復・廉泉、兄の丁寶書とともに文明書局を創業し、教科書を翻譯・出版することを主な仕事にした。[24]

光緒三十年（一九〇四）、上海文明書局により日本石神亨著・沙曾詒譯『肺病問答』[25] が出版された。裝丁や封面から題字まで、ほとんど原著と變わらない。日本人が中國書を翻刻した明治以前においては、書籍の様式についてもできるだけ原作と同じになるようにした。この點から考えてみれば、日本の醫學書を內容から形式に至るまで、できるだけ原作と同じように中國語版に翻譯・出版することは、近代日中出版關係の一つの轉換點であると言えよう。南菁書院の同窓であった丁福保はその序文（一九〇三）で、以下のように言った。

> いまこの本の翻譯は終わり、私に郵送されてきた。私はこれを讀んで、過去のことを思い出し、感嘆した。もしこの本が十年前に見られれば、私の家族や舊友は必ずその福を蒙ったろうに。どうしてこのように落ちぶれてしまうことがあっただろうか。[26]

自分の經驗から讀者にこの本を勸めているのである。確かに、丁福保は病弱で、父親や親戚には肺結核のため亡くなった人が多く、[27] 彼は肺結核を非常に警戒していた。したがって、その後、彼が翻譯・編纂した「丁氏醫學叢書」では、結核に關するものが多くを占めている（表一）。

光緒三十二年（一九〇六）、丁福保は無錫で同人達と一緒に譯書公會を組織し、醫學書を出版しようとしたが、光緒三十四年（一九〇八）に經費の問題で中止した。その後、個人で出資し、上海へと進出した。翌年五月、端方・盛宣懷に命じられて、日本へ醫學・醫學教育の視察に赴き、醫學書や古佚書を探して回った。訪日期間中、丁福保は肺結核の專門家で

表１「丁氏醫學叢書」のうち肺結核通俗書一覽

書　名	作者・譯者	出版社	各版時期	備　考
肺癆病預防法	【日】竹中成憲、寺尾國平著、丁福保譯	上海：文明書局 上海：醫學書局	1908 初版、1909、1913、1917、1926 年等	第 1 章から第 16 章まで、竹中成憲の著作をもとに翻譯・編纂。第 17 章から第 19 章まで、寺尾國平の著作を參照。第 20・21 章は傳統醫學を參照。
醫學綱要・肺癆病新說	【日】井上善次郎著、丁福保譯	上海：文明書局 上海：醫學書局	1908 1915	『井上內科新書』全 4 卷、吐鳳堂、1905 年 9 月–1907 年 3 月（初版）。
肺癆病學一夕談	丁福保譯著	上海：醫學書局	1910、1911、1914、1929	
肺癆病救護法	【日】竹中成憲著、丁福保譯述	上海：文明書局 上海：醫學書局	1911 1912、1916、1921、1926	
癆蟲戰爭記	丁福保譯著	上海：醫學書局	1912、1916	日本廣澤汀波『結核菌物語』（博文館、1910）を參照。
肺癆病之天然療法	丁福保譯述	上海：醫學書局	1913、1947	
新撰虛勞講義	丁福保	上海：醫學書局	1926	
肺結核近世療法	丁惠康編	上海：醫學書局	1930	
肺勞實驗新療法	【日】小田部莊三郎著、丁福保譯	上海：醫學書局		
肺病易愈法	丁福保	上海：醫學書局	1933	
肺病指南	丁福保編	上海：醫學書局	1933、1937、1941、1948	
實驗療肺學	丁惠康編	上海：醫學書局	1936	
各國肺癆最近統計（附：我國防癆之實施方法）	丁惠康編	上海：醫學書局	1936	
肺病實地療養法	丁福保	上海：醫學書局	1940 年 1 月初版、1947 年 2 月再版	
肺病最經濟之療養法（又名鬪病術）	丁福保	上海：醫學書局	1940	
肺病自然療法	【日】原榮著、丁惠康譯	上海：醫學書局	1941	虹橋療養院叢書に收錄。

ある青山胤通の元を訪れ、日本には肺結核の新しい治療法があるかどうかを尋ねた。青山は日本においても未だ新しい治療法はなく、衛生に注意するしかないと答えた。[28]

宣統二年（一九一〇）、丁福保は上海で「中西醫學研究會」を結成し、『中西醫學報』を創刊して、自ら主編を擔當した。[29] この雑誌の執筆陣は主に丁福保と彼の周邊人物で構成され、多くが日本留學を經驗しており、その活動範圍は上海を中心とし、江蘇・廣東など各地の醫學者とも聯携し合った。『中西醫學報』には肺結核に關する文章が數多く掲載され、「丁氏醫學叢書」からの拔粹、書評、ほかの雑誌からの轉載、會員の寄稿など、內容は豐富であった。會員寄稿には、家族が肺結核に罹患した悲慘な樣子や自分の闘病體驗を詳述したものがある。例えば、愛知醫學專門學校に留學していた朱笏云は「病床筆記」を書いて、日本で肺結核を治療した經驗を詳しく記錄した。[30]

丁福保が翻譯・編纂した醫學叢書は、單に日本の醫學書（多くはドイツ醫學書から翻譯したもの）をそのまま翻譯するわけではなく、自分の經驗や感想も十分に加え、たびたび日本の問題點も指摘した。例えば、『肺癆病救護法』の「肺結核之豫防法」という章で丁は貧困な肺病患者のため、國が療養所や施藥院を設立しなければならないと述べ、「貧しい日本は、こうした設備を一切整えておらず、ただ意味のない法令を發布しただけだった」と批判した上で、明治三十七年（一九〇四）二月內務省令第一號「肺結核豫防ニ關スル件」を翻譯した。[31] そのほか、ＹＭＣＡが翻譯した米英諸國の新しい醫學知識をも取り入れた。

彼は讀者の興味を惹くため、樣々な工夫をした。例えば、表紙の題目には一般讀者に馴染みのある「肺癆」などの言葉を使用した。[32]『肺癆病救護法』の印刷が完了した後に、讀者に分かりやすく說明するため、結核菌圖一枚を追加しようと試みもした。[33] 丁福保は醫學叢書を宣傳するため、『申報』『大公報』などのメディアを利用して大量の廣告を掲載した。そのため、淸末から北京政府時期にかけて、彼が翻譯・編纂した肺結核に關する書籍は大變人氣があった。近代中國の醫療衛生體系がまだ整っていなかった過渡期において、丁福保の翻譯作業は東西諸國の醫學知識を國內に宣傳・定着させるこ

とに大きな役割を果たしたと言えるだろう。[34]

丁氏醫學叢書の特徴をみるために、宣統三年（一九一一）に上海文明書局より出版された『肺癆病救護法』を例として紹介しておきたい。冒頭には三篇の序文がある。最初は汪一鶴の序文であり、その中で述べられている歐米や日本の肺結核感染データは、前述した上海文明書局版の『肺病問答』から引用したものである。

肺結核病學について、我が國では專門書がない。前人の著述に見られるのは、ただ傳屍・骨蒸・癆瘵・虚損などの名のみであり、病因を知らなかったため、遂に正しい學說と治療法を缺くに至った。一八八二年、ドイツ人コッホ氏が肺結核の病因を發見した。結核菌が呼吸により肺臟に侵入し、毒素を散播するということだ。ここに、肺結核という病名は有名になった。世界が進化すればするほど、肺病の感染は多くなる。歐米の統計表から考察すると、人口百七十萬の內、肺病により死亡する者は約二十四萬人いる。[35]日本の石神亨がかつて言うには、日本の肺病患者は毎年約三十萬人いる、と。我が國は戶籍法がないため、毎年の死亡者數は不明であるが、人口が日本の數倍あることから計算すれば、肺病患者は必ず日本よりはるかに多いはずである。その上、醫學の水準は日本の十分の一にも及ばない。〔肺結核の感染が深刻な狀況は〕長く續いているが、いつになったら終わるのか。これは恐るべきことだ。

このように肺結核の恐ろしさを語った後に、自分の家族の肺結核を患った經驗を附け加え、肺結核の恐怖を現實のものとして讀者に實感させる工夫がなされている。最後に自分が肺結核に罹患して完治した經驗を述べ、この本の價値を示した。

昔、親戚や友人で肺病により亡くなった人々は數え切れない。皆治療法を知らなかったため、死亡するに至ったのである。甲辰〔一九〇四年〕の夏、私の四弟は癆瘵により亡くなり、己酉〔一九〇九年〕の冬、五弟もまた肺病により亡くなった。庚戌〔一九一〇年〕正月、私はフィリピンから歸った直後に突然重度の喀血を患ったが、幸いにも先生の治療を受け、先生の指示により博習醫院へ療養に行った。春から冬まで、八箇月を經て完治した。病院に行った

際に受けた各種の治療法については、ことごとく先生の各書籍に書かれたものと寸分も違わない。[36]

愛知醫學校に留學した朱笏云は序文で、自己の肺病體驗を詳細に述べた後に、病夫と肺結核を結びつけた。

窗や扉を閉めるのはわが國の社會の惡習であり、腰や背中が曲っているのは我が國の學者の常態である。同じ五官や體であり、同じ飲食・衣服・居住であるが、外國人は必ず我が中國を病夫とそしる。病夫と言われるのは、我が國の國民が衞生の方法を知らず、我が國の肺病患者數が各國と比べて多いからである。[37]

この本に關して、宋敎仁は書評（署名は漁父）で、中國の醫學の狀況は頽廢しているため、病夫は極めて多く、肺結核問題は甚大な被害をもたらすだろう、と言及した。[38]

つまり、この時期に出版された肺結核に關する出版物は、單に疾病そのものを說明するだけではなく、病夫と肺結核を結びつけた。翻譯者及び推薦者は、ただ自身の體驗を述べるだけではなく、肺結核を國家の運命や存亡と關わる重大な問題と見なした。淸末において、身體の强さは國家、民族の强さに直結した。病夫言說は、身體の虛弱を問題化し、亡國滅種の危機感を煽ることによって身體强化の必要性を正當化し、人々にその履行を迫ったのである。[39] このような背景の元で醫學關係出版物は販賣量を大いに伸ばし、民間書肆にとってその存續を左右するほどの意味を持つに至ったのである。[40]

丁福保は患者を診察した際に、丁氏醫學叢書を積極的に宣傳した。例えば、一九一一年、彼は蕪湖に招かれ、現地の十六歲の少年を肺結核病と診斷し、飲食・空氣・精神・入浴・藥物など五つの方面から治療法を決めた。その中でも「飲食療法」については、毎日普通の食事以外に、三回牛乳を飲み、その都度雞卵二個を生のまま入れて一緒に飲むよう勸めた。そのほか、『肺癆病一夕談』に紹介された飲食法を參考にするよう診斷書に附け加えた。また、豫防法については、『肺癆病一夕談』の附錄に詳しく論じられており、その通りに實行すべきだと說いた。[41]

一九一三年、丁福保は外來患者を診療した際、五人の肺結核患者を確認した。この日にちょうど『肺癆病之天然療法』が出版されたため、肺病患者にそれぞれ一冊ずつ贈った。[42]

診察現場において、丁福保は自らの譯書を患者に配るだけでなく、ＹＭＣＡ全國協會書報部主任幹事である謝洪賚が書いた『免癆神方』も配布した。[43]『免癆神方』は一九一〇年から『通問報』及び『中西醫學報』に聯載され、一九一〇年から一九一一年の間に出版され、五千部から一萬部刊行された。防癆を宣傳するために無料で讀者に配布され、翻刻も行われた。[44]謝氏が肺結核のため亡くなった後、一九一九年、長沙ＹＭＣＡ名譽總幹事で、上海の慈善家である聶其焜（潞生）はこれに出資し、一萬部を增刷して讀者に贈呈した。[45]

丁福保は、熱心に上海工部局の醫官・政治家などの名士らと交際し、通俗書籍（特に醫學書）の印刷・藥品生產[46]・病院の開設や運營などの手段により、上海で堅固な立場を築いた。實際に、丁氏醫學叢書の讀者數はかなり多かったと考えられ、各種の新聞や雜誌に讀者の反應が見られる。[47]彼が編纂・翻譯した肺結核書籍の多くが增刷・再版され、少なくとも一九三〇年代後半まで流行し、肺結核知識の傳播及び定着に重要な役割を果たした。次に近代中國において多々引用された肺結核死亡者數の由來を見てみることにしたい。

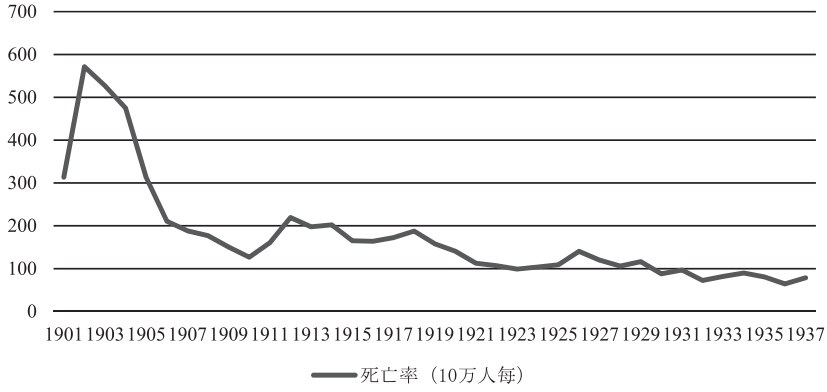
二　疾病統計データの活用

前述した肺結核の通俗書では、肺結核の恐怖や近代國家における衞生制度の成立を說明するために、各國の肺結核死亡率や感染率を多く引用している。衞生政策の實施の有無や肺結核の感染率・死亡率の高低は、ある意味で文明國家と非文明國家を分かつ境界線であった。人口統計・疾病感染統計・死亡統計などは、人口經濟學的には人間を國の生產力として分析するもので、國家が實質的に國民の身體狀態を把握するための基礎となる。梁啓超は人口經濟學の視點から中國歷史上の革命により損失した人口や文明を說明する際に、ウィリアム・ファー（William Farr）が統計したイギリスの肺結核死亡者數、及びそれにより推算された經濟損失額を引用した。[48]このような敍述法は後の時代に中國の肺結核問題を論說する際にも踏襲された。

過去の研究では近代中國の肺結核死亡率や感染率のデータが屢々言及されてきたが、當時の政治家・知識人・商人などがこれらのデータをどう利用したかは未だ考察されていない。死亡者數の正確さそのものより重要なのは、むしろ當時の人々がどのようにこれらのデータを理解・利用したか、という問題である。本節ではこれらの統計データの來源を考察した上で、當時これらのデータがいかに利用され、傳播されたかを檢討したい。

近代中國最初の本格的な疾病統計データは、上海工部局（Shanghai Municipal Council, SMC）衞生處の年度報告（Health Officer's Report）に見られる（圖一）[49]。十九世紀末まで、上海工部局年度報告で肺結核は特に重視されておらず、最も注目されていたのはコレラ・天然痘などの急性傳染病であった[50]。一九〇一年、工部局衞生處の醫官が死亡原因における肺結核の高い比率に初めて注意を向け、肺結核罹患の最も主要な原因は、中國人の痰を吐く惡習であると指摘した。報告書には、痰の處理法、肺結核患者使用後の部屋・寢具・衣服などの消毒法も紹介されている。また、肺結核の豫防に最も有效なのは、陽光・清潔な空氣・消毒劑・ブラシであり、埃を拂う際に、結核菌を飛び散らす羽根ハタキを使わず、濡れ雜巾を使わなければならない、と詳細に說明した[51]。

一九〇二年、上海工部局衞生處は租界に居住している中國人の死亡データを統計し始める。一九〇三年の年度報告では、上海租界の住民の最も主



（出典：*Shanghai municipal council reports.*）

圖１　上海公共租界における中國人居住者の結核死亡率（1901-1937 年）

要な死因は、外國人か中國人かを問わず、肺結核であると示した。醫官は、住居が狹く混雜している狀況に注意を呼びかけた。肺結核により死亡した中國人住民は一九七六人、つまり四人の死者のうち一人の割合に達し、天然痘・コレラにより死亡した人數よりも遙かに多かった。[52]

一九〇六年の年度報告は、上海で中國人肺結核患者のため隔離病院を建てる必要があると提言し、これにより少なくとも家族への傳染を免れるだろうと述べている。そして、やや皮肉な口調で中國人肺結核患者の狀況を以下のように述べた。「肺結核にかかった中國人患者はいつも靜かに家にこもり、無用な藥一瓶を飲み、彼の家族及び彼と接觸した者の危險な感染源となっている。[53]」と。この年の衞生報告はカナダ人宣教師ドナルド・マクギリブレー（Donald Mac Gillivray）と中國人である范禕との共同作業によって中國語に翻譯され、『萬國公報』に揭載され、租界の肺結核死亡者數と中國人の痰を吐く惡習をはっきりと指摘した。[54]

一九〇六年分の租界中國人肺結核死亡データは、その後、肺結核の撲滅を呼びかける度に、各種の論說や文章に多々引用された。[55] この年から、上海工部局衞生處は「癆症」と題した中國語のチラシを大量に發行して肺結核防止に乘り出した。[56] このチラシは長期にわたって發行され、中國の醫學雜誌や『申報』[57]などにしばしば轉載された。[58]

翌一九〇七年、上海工部局は他の病氣と比べて厖大な肺結核死亡者數を問題視し、中國人に衞生知識を身につけさせることを急務とした。[59] 以前コレラが爆發的に流行していた頃、上海人を雇い、鈴を振って人を集め、街中に上海方言でコレラの防止・治療の要點を宣傳したことがあり、この方法が效果的だと考えられた。そこで、工部局の醫官は、コレラの流行がおさまった後も、地元の人を引き續き雇って、街中で肺結核防止對策・豫防接種・一般的な衞生對策などを宣傳する必要があると提言した。[60]

上海工部局衞生處の人口統計データは樣々な場合に活用された。例えば、一九一五年六月二十四日、アメリカから歸ってきたばかりの醫學博士兪鳳賓は、寰球中國學生會で開かれた講演會で工部局衞生處のデータを用い、「我が國で肺結核

に罹って亡くなる者は毎一時間に九十七人に達し、その數は毎年約八十五萬二千三百四十八人に至り、日露戰爭による日本の死傷者數の十七倍以上に當たる」と推算した。[61] また、「避癆圖」數千部を印刷して聽衆に配った。[62]

同年七月九日、『申報』に掲載された上海四馬路五洲大藥房の「人造自來血」の廣告文にも、兪鳳賓の演說で言及された數字が見られる。數字に續いて、我が國が肺結核のため弱くなり、頻繁に侮辱を受けたことを、「日本は〔日露戰爭によって〕東亞に權勢を誇るが、我が國は息もたえだえであり、頻繁に侮辱されている」、「我が國で十人に九人は肺病になる者がいる。至る所に痰ばかりが見られ、いつも咳嗽が聞こえ、他國の人に最も嫌惡されているが、我が國ではこれが殆ど習慣となっている」、「國民が弱くならないように、國勢が衰退しないようにと欲したところで、どうにもならないだろう」などと記した。[63] 同年十二月二十一日から、上海イギリス租界の太和大藥房が生產した「保肺漿」の廣告は、前述のデータを引用し、「八十五萬二千三百四十人を助ける靈藥」と注意を引きやすいタイトルを掲げている。[64] これらの廣告は工部局のデータを巧みに利用し、肺結核の危險性を强調し、藥品を宣傳する目的を達した。それと同時に、肺結核の恐ろしさもこれらの數字および敍述により廣められた。

一九一六年、上海で開催された第一回中華醫學會において、伍連德[65]などの中華醫學會の會員は各地方政府に結核の蔓延を防止するよう呼びかけた。[66]

一九二三年、工部局衞生委員會は、上海では狹小・過密・不衞生な居住環境が廣く見られることから、データに反映された肺結核の死亡率は最も高いとは言えないが、實際の死亡者數が統計データより高いことは間違いないと判斷した。[67]

しかし、工部局年度報告においては、中國人の肺結核感染率や死亡率だけが高いとされていたわけではない。例えば、一九二四年に出現した新しい問題は、租界に住んでいた外國人間で肺結核が流行するという狀況である。その中で、ロシア人及び中國以外のアジア諸國（フィリピン・インド・日本など）の外國人の肺結核感染狀況が中國人より深刻だと指摘された。そのため、この年工部局が出した公衆衞生宣傳チラシは、英語・中國語版以外に、日本語・ロシア語版も加えられ

た。數多くのロシア難民が租界に流入したが、病氣のため瀕死に至った患者のみが肺結核病院に受け入れられた。[68] 工部局の醫官は、肺結核にかかった難民を收容して治療するのは、患者の命を助けるばかりでなく、公衆が感染することを避けるためであると説明した。[69] この年、工部局は前年（一九二三年）の衞生報告から中國と關係ある部分を拔粹して二千部を印刷し、中國人の學校及び慈善團體に配布した。[70]

一九三〇年、上海工部局は中國語版の公報及び年報を發行し始め、毎號三千二百部を印刷した。[71] 上海工部局が毎週發行していた公報には、感染病の統計結果が掲載され、肺結核の高い感染率は常に顯著であったと言われる。[72]

工部局衞生處の統計した肺結核死亡率・感染率のデータは、印刷物や出版物以外に、ＹＭＣＡの宣傳によっても廣められた。實のところ、清末より北京政府時期にかけて、ＹＭＣＡは肺結核防止に關する宣傳に積極的な姿勢を示し、重要な役割を果たしたと考えられる。[73] 張志偉の研究ですでに指摘されたように、二十世紀初頭、上海のＹＭＣＡは活潑な社會ネットワークを形成し、中國人紳商・工部局・中國人官僚・中國知識人・アメリカ領事などと密接に關わり、各國の政治家・商人・知識人間で活動していた。[74] 例えば、一九一五年二月第一週に、中國醫學會は上海ＹＭＣＡの會場において醫學・衞生展覽會を開いた。[75] その中でも肺結核に關する項目が最も注目を集めたようである。會場ではアーサー・スタンレー（Arthur Stanley、中國語名は史丹萊など、一八六八―一九三一年、イギリス人、上海工部局醫官）が編纂した『癆症或肺痨防免及其治療之方』が配布され、病理標本・模型・圖形・寫眞などが陳列された。

そこには次のような裝置があった。中國風の服を着た少年の人形が、門から出た所にある棺までやって來て中に入っていく。それが終わりなく循環する。周りにはいくつかの墓の模型が設置され、肺結核病の犧牲者が極めて多いことが示された。また、會場の眞ん中に置かれた別の裝置は、中にベルが吊るしてあり、それが頻繁に鳴り響く。側には看板が一枚立てられ、ベルが一回鳴るごとに一人の中國人が肺結核で死亡したと、英文・中文でそれぞれ説明されていた。また、毎時・毎日・毎年に肺結核のため犧牲となった中國人の人數も書かれてある。これらのデータは前述した兪鳳賓の演説や醫

藥廣告に見られた數字とほぼ一致しており、工部局衛生處のデータに基づいて推算したものだろう。[76]

この時期にＹＭＣＡが中國で行った衛生宣傳は、殆どが視覺的な展示であり、これによって見る者に強烈なインパクトを與えた。こうした宣傳を通じて、誰もが肺結核問題の深刻さを理解したであろう。

一方北京では、一九二一年九月に開設された北京協和醫學院（Peking Union Medical College）が中國の肺結核問題に注目し、その研究を始めた。一九二四年二月十五日、北京協和醫學院の會議で、二人のアメリカ人醫師が當地の醫事概況を報告した。その中の一つの報告によれば、「中國では毎年の正確な死亡者數は不明だが、死亡率はかなり高いと推定できる。肺結核は三大死因の一つであり、身體の虚弱と傳染による。ニューヨークやロンドンでは肺結核により毎年千人あたり三十人が亡くなる。しかし北京では三百人以上、すなわちニューヨークやロンドンの十倍以上で、これは非常に恐ろしい狀況である」と。同年六月、北京師範大學の新任學長であり、協和醫學院顧問委員を務める范源廉[77]は、大學で週に一回開かれる會議で「我々は本當に病弱な國民となることに甘んじるのか」という題目で講演を行った時、この報告を引用し、中國人の知力は弱いわけではないが、體力は本當に嘆かわしいと指摘した。そして友人のアメリカ人學者が、中國人學生は學問では期待できるが、彼らの大半は體が弱く、歸國した後、肺結核になる可能性が高いと語ったことを紹介した。范は健康が學問や事業に對して及ぼす影響と重要性を强調して、病弱を防ぎ「病夫」の恥辱を晴らすための消極的・積極的二種類の方法を提示した。[78]

全國的な調査データこそなかったが、當時中國の肺結核死亡率がかなり高いという認識は、少なくとも一九二〇年代中期の時點で既に定着したと推察できる。よって、當時の一般認識として、中國の結核感染率も同樣に極めて高いと考えられた。[79] しかし、本當にそうなのだろうか。

協和醫學院醫學研究部の結核研究者ジョン・Ｈ・コーンズ（John H. Korns）は中國の肺結核問題に注目し、かなり早い段階で中國人兒童の肺結核感染率が非常に高いのではないかという疑いを抱いた。[80] ところが、一九二〇年代前半、彼が北

京・保定に住む八歳から二十歳までの健康と思われる中國人兒童二〇四九名に對して行ったツベルクリン反應檢査の結果から見れば、中國人兒童の結核菌感染率は歐米各國の平均水準より遙かに低いことが明らかになった。また、教會學校・政府學校での感染率は香山慈幼院などの貧民學校より高く、南方の感染率は北方より二倍高い、などの調査結果を得た。コーンズは、中國人の生活狀況が不衞生で、生活習慣が惡く、經濟水準も低いが、中國北方の日光量は充分で、兒童はよく室外で遊んでいるため、結核感染率が低くなると解釋した。また、中國における幼兒の肺結核死亡率が常に高いため、生き殘った兒童の結核菌に對する抵抗力が西洋の平均水準より高くなるかもしれないと指摘した。[81]

こうした調査結果が出たにもかかわらず、「中國は結核感染率が高い」というイメージは拂拭されなかった。その原因は、彼の研究報告が中國語に翻譯されず、そのうえ中國語で書かれた研究の多くが「中國は結核感染率が高い」という見方を堅持していたからである。

第二章　南京國民政府時期（一九二八―一九三七）

一　防癆救國の宣傳

第一章では、肺結核の知識が出版物や死亡率を通じてどのように近代中國人の視野に入ったのかを考察してきた。本章では、南京國民政府時期における肺結核に對する新たな認識について分析し、肺結核がどのように東亜病夫と結びつけられ、さらに今日の中國人の肺結核の印象にどのような影響を及ぼしているのかを具體的に檢討してみたい。

清末から北京政府時期にかけて、雜多な肺結核通俗書が次々と出版され、肺結核の高い死亡率が人目を引いた。知識人たちは肺結核の蔓延と亡國滅種の危機を「病夫」という觀念によって結びつけ、中國の高い肺結核死亡率や感染率に訴えて、民衆を救國へと立ち上がらせようとした。その結果、肺結核の恐ろしさはこうした言論を通して擴大强化された。南

京國民政府は内憂外患に對處し、民族・國家の復興を實現する手段の一つとして、衞生事業を推進した。[82] 政府は疾病・死亡などの統計データを重視し、首都南京において「生命統計」を實施し、人民は法定傳染病・出生・死亡について政府に報告する義務があると定めた。[83] このように、政府が醫療・衞生問題に本格的に取り組むのは南京國民政府時期になってからである。[84] こうして、肺結核の問題は再び「病夫」と強く結びつけられ、脚光を浴びることになる。

一九三三年十月二十一日、中國防癆協會が上海に設立され、「防癆救國」というスローガンを掲げた。この動きは緊迫する時勢や日に日に高まるナショナリズムと呼應していた。會誌『防癆』の創刊號で、中國防癆協會總幹事である張君俊は次のように語った。

中國はいま大きな病氣にかかっているが、その病氣を治療する前に、まず民族の病氣を治療するため、民族復興運動を起こさなければならない。しかし、中國の民衆は老若男女を問わず、皆肺結核の氣がある。肺結核の身を以て、民族復興運動を推進することは不可能である。ゆえに、民族復興運動の前に、まず防癆運動を推進しなければならない。[85]

上海市市長吳鐵城は成立大會で演說し、肺結核により毎年百二十餘萬の死者と千萬以上の患者という巨大な犧牲が出ており、社會・經濟に深刻な影響を與えていることを强調した。[86]

吳鐵城は防癆運動の中で大きな役割を果たした人物である。彼は南京政府から「海疆要衝、首都門戶」とみなされていた上海の市長に任じられた重要人物であり、淞滬警備司令を兼任し、軍政兩權を握り、積極的に「大上海建市計劃」を推進していた。吳によれば、「上海市の中心區が發展できるかどうかは、單に一つの都市の問題ではなく、我が中華民族が文化を創造し、自立生存し、古いしきたりをとりのぞくことができるかどうかの試み」であった。[87]

長い間醫學界で注目されてきた肺結核問題は、こうして防癆救國のコンテクストの中で、上海市政府に重視されるに至る。しかしこの重視というのは、日本のように「結核豫防法」などを公布して政策面から實施するという形ではなく、一

つの地域を中心として、社會各方面の勢力と聯携し、共同で提案を出し、全國に影響を及ぼす形をとった。各界の聯携宣傳により、肺結核はすでに誰もが知る恐ろしい疾病となったが、南京國民政府は有效な衞生措置を執行する能力を持たなかった。

一九三四年十一月から、中國防癆協會は毎月機關誌『防癆』千五百部（毎號約六四頁、およそ四萬六千字、年間購讀者一二〇人・取次販賣數一五〇部・理事會や關係者への寄贈分七五〇部・圖書館や民間團體への寄贈分四百部）を發行した。創刊號から一九三五年六月まで、懸賞投稿の募集が行われた。投稿文は、「防癆運動と中國民族復興運動の關係」「防癆と教育」「中國民族の體質から防癆運動を論じる」という三つのテーマから一つを選ぶことになっていた。投稿文章は合計八十四篇あり、主に一つ目のテーマに集中していた。おそらくこれが當時もっとも關心を集めた話題だったと考えられる。[88]

清末から北京政府時期まで上海の出版界・醫療界において活躍していた丁福保だが、西洋醫學の立場に立つ肺結核の專門家や政治家を中心とした中國防癆協會の中樞には入れず、杜月笙・褚民誼・姚慕蓮などの有名人と共に、防癆協會の監事となるにとどまった。彼は自分の影響力を廣げ、肺病療養院などを經營するため、防癆に積極的な姿勢を引き續き示した。例えば、彼は丁氏醫學叢書の『肺病指南』『肺病豫防法』『肺病療養法』などを各界に寄贈することを中國防癆協會に依頼し、一九三五年末までに合計二千五百部を配布した。[89]

一九三六年、南京特別市衞生事務所は『南京衞生』という月刊誌を發行した。一九三七年三月二十三日から二十八日にかけて、南京衞生事務所及び國民政府衞生署は民衆に肺結核に對する注意を促すため、中國防癆協會と聯携して防癆宣傳週を擧行し、南京ＹＭＣＡで防癆展覽會を開いた。南京市健康教育委員會は各學校の防癆教育を推進し、學生に毎朝防癆歌や痰を吐くことを禁じる歌を歌わせ、各小學校の生徒を防癆展覽會に行かせた。[90]この時點までに、上海・南京など各都市において大量の防癆歌が創作され、各學校や團體に送られて、歌われていた。[91]

二　東亞病夫と肺結核

第一章ですでに論じたように、清末以來の言論や出版物ではすでに、肺結核を病夫の侮辱と結びつけることがあった。一九一二年、留日學生朱笏云は、日本の肺結核死亡者數から中國の肺結核死亡者數を六〇萬以上と推定した。また、日本の肺結核撲滅政策を參考にし、中國政府・地方官紳・醫者・國民に對し、結核豫防の重要性を呼びかけて、各々盡くすべき義務を述べた。そして、中國政府が肺結核防止事業に一定の成果を示した後に、萬國結核防遏大會（The International Congress on Tuberculosis）に參加して、歐米諸國と聯携して結核を防止することを勸めた。

歐米各國と聯携して結核を防止すべし。歐米各國に吾が國の地方自治の大進歩を知らせ、もう我々を老大と貶めず、我々を病夫と見なさないようにすべし。そうして初めて我が國の恥を雪ぐことができ、國威や國權を守ることができ、吾々數億の炎黄貴胄は二十世紀の劇烈な競爭の世界において安心することができ、踏みにじられることもない。[92]

要するに、中國が病夫と侮辱されたのは、國家の後進性及び國民の病弱という二重の文脈からである。逆に言えば、結核防止を通じて、國家の實力を表し、病夫のレッテルを剝がし、弱肉强食の世界に立つことができるのである。

上海工部局や北平第一衞生區などの死亡データが登場した後に、中國の肺結核感染に關する實情は徐々に認識された。また、結核菌檢査・X線撮影などの技術の普及に伴い、個人の肺結核に對する認識も徐々に明確になってきた。

南京國民政府が成立してからは、各機關が統計した疾病データが爆發的に增える。一九三〇年代以降、中國で頻繁に引用された疾病統計データは、協和醫學院と聯携した北平第一衞生區事務所が作成した統計（表二）である。協和醫學院の肺結核專門醫師盧永春はこのデータから、全國の肺結核患者數は約一一〇〇萬人、毎年の肺結核による死者は一二二萬人、全國で平均十六人に一人が結核病を患っていると推計した。[93] これは相當驚くべき結果だと思われる。郭人驥は著書『實驗圖解癆病救星』の冒頭にこのデータを掲げ、「肺結核死亡率、我が國首位にたつ」と强調した。[94]

表２　1926-1937 年北平市内城第一衛生區結核死亡率統計（1/10 万）

年度	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937
死亡率	524	500	464	307	250	262	268	294	229	225	197	192

（出典：饒克勤、陳育德「民國時期北平市居民醫學人口資料的分析研究」表 11、『中國衛生統計』1995 年第 6 期。）

高嶋航の研究によれば、南京國民政府は否定的自畫像を通して人々の身體や日常生活を政治化し、國家化しようとした。こうして人々は日常生活の振る舞いの一つ一つに民族や國家を感じ取り、中國の國際的地位に思いを馳せるよう促された。その原動力となったのが「病夫」言説であり、また恥の感覺であった。[95] これによって、肺結核患者を病夫と結びつけることが普遍的になってきた。例えば、ある文章は各地の疾病調査の結果を詳しく羅列した上で、中國人は「名實ともに東方病夫」であると説明した。[96]

防癆運動においても、東亜病夫と肺結核を結びつけ、危機感と侮辱感を高める言論がよく見られる。例えば、中國防癆協會宣傳組主任李兆璋は、一九三六年から一九三七年にかけて、上海聖マリア女子中學校、[97] 大夏中學校、[98] 蘇州振華女學校などの學校で多くの防癆講演を行ったが、冒頭部分ではいつも次のように語った。

公園や道路や映畫館を問わず、我々は常に背中を丸め肩をすくめ、顔が青く血の氣がない人々を見かける。彼は絶對に西洋人ではなく、日本人でもなく、我々の同胞—中國人であることは間違いない。ほかの外國人に輕視されるのはもちろんだが、すでに國を失ったインド人も我々をばかにする。彼らが言うには、中國は病國であり、中國人は東亜の病夫である。[99]

女學校で講演した際に、李兆璋は特に中國人女性の健康問題を強調した。

蘇州人はあまり運動に氣をつけないと聞いたことがある。特に蘇州の女性は、一日中家で瓜の種を食べて、全く運動をしないため、少しも元氣がなく、體も非常に衰弱してしまう。これは肺結核の原因となる。[100]

對照的に、日本の女性は運動を重視しているため、もし我が國が體育を振興し、衛生を積極的に提唱し、防癆運動を推進するのでなければ、日本の女子だけでも我々を敗るはずであると強く警告した。[101]

この時期に出版された肺結核關係の書籍は、常に東亜病夫と肺結核を密接に結びつけている。本稿冒頭で言及した『實驗圖解癆病救星』はその一例である。中華民國醫學會が發行した機關誌『新醫學』はこの本を紹介する際、以下のような一文を加えた。

肺結核の被害は最も恐ろしい。アヘン・梅毒などは放蕩浪漫の徒に災いするので、自業自得と言えるが、ただ肺結核は概ね勤勉懸命な人をひそかに襲撃する。卒業を間近に控えた青年男女が、痩せて顔から生氣を失い、肺結核の末期で遠からず死に至る者ばかりなのをかつて見たことがある。極めて殘酷だ。世界各國の中で、我が國は肺結核を患う人が最も多いため、「東亜病夫」の雅號を與えられるに至った。

また、學問を求める際には防癆を忘れず、强國を求める以前にまず自强しなければならないと呼びかけた。[102]

特效藥がなく、公衆衞生の水準が低かった時代において、誰でも罹患する可能性があり、しかも國家の存亡と關わる肺結核の話題は、民衆を敎化する絶好のテーマであった。政府や知識人は、肺結核を豫防・治療することも一種の救國の方法だと宣傳した。これによって、國民は皆肺結核を豫防・治療する責任や義務を果たすことを通して、救國に貢獻することもできた。また、肺結核を東亜病夫と結びつけるのは、國民の屈辱感を喚起する效果がある。以上のような二重のコンテクストの中で、肺結核は誰もが知るべき重大な問題になったのである。ただし、肺結核と東亜病夫を結びつけるのはあくまでも政府や知識人たちが意圖的に宣傳したことである。當時一般の民衆がこれらの言說をどの程度受け入れたのかは、別の問題である。

南京國民政府時期の肺結核に關する言論は、非常に豐富な意味を持つ。例えば、アメリカ留學の經驗があり、かつて南京國民政府衞生機關で働き、後に延安に赴いて共產黨員になった高士其[103]は、左派的な視點から防癆救國など主流の言論に見られない論點を提起した。

一九三五年、高士其は貧困層の肺結核患者に對して、「肺結核貧苦大衆への手紙」という文章を書いた。「現在、中國の

人民は痩せて骨と皮だけになり、これ以上痩せることはできない。中國の領土も日に日に痩せていき、肺結核の病狀も日に日にひどくなる。」「死を求めるのも難しい、活路を求めるのも難しい。どうするか、もがくしか方法はない。もがく、この言葉は力があり、神聖であり、貧窮した人民と國家の最後の武器だ。生死を顧みずにもがくのが、今日の中國人の手段である。」「肺結核の治療は滋養にあり、國家の結核病も同じだ。滋養は民生問題と同じである。救國しようとすれば、まず民生を重視しなければならない。民衆が生きていくすべがなければ、たとえ全國民が兵士となったとしても、皆飢えた兵士である。全國で軍事訓練を行い、全國の資金で飛行機や大砲を買っても、飢えた兵士は歩けず、銃を持つ力もない。」「國家の積もり積もった垢や汚れも新しい風習により取り除かれるべきだ。全ての汚職官吏を取り除いてこそ、國家の肺結核が好轉する見込みがある。[104]」

高士其はかつて南京中央醫院檢驗科主任を擔當したが、院長が汚職に關わったことに不滿を抱き辭職したという。[105] 肺結核にかかる國家を語る時に、汚職官吏の問題にも言及したのは、彼の立場が南京國民政府側の官僚や醫師と明らかに違うことをよく示しているだろう。

中華人民共和國が成立すると、南京國民政府時期に著名だった肺結核專門醫師は新しい衞生機關に編入され、肺結核の教科書を編纂した。肺結核の治療法や豫防法は時代によって變化したが、肺結核に對するイメージは前の時代のものがそのまま引き繼がれた。よって、いわゆる舊社會で東亞病夫イメージと結びついた肺結核を撲滅することは、むしろ新社會の使命であると認識された。のち、文化大革命が終結すると、本格的な肺結核豫防・治療が行われるようになる。[106] この時期に活躍していた肺結核專門醫師の多くが南京國民政府時期の肺結核專門醫師の弟子にあたり、彼らはかつて師の記憶に強い印象を殘した肺結核について、師の認識をそのまま受け繼いだであろう。

第三章　日中戰爭期及び戰後の言論（一九三八―一九四九）

一九三〇年代中期、防癆救國の言論はピークに達し、切迫した危機感が肺結核と東亜病夫を結びつけた。日中戰爭勃發後に中國防癆協會はやむを得ず活動を中止したため、先行研究では、近代中國の肺結核問題をめぐる檢討時期を一九三七年までと設定するものがよく見られる。[107] ところが、戰爭は國民の身體を管理する必要性を高めるため、實際に肺結核の問題化は、日中戰爭により一層强化されたと考えられる。第一に、肺結核の傳播・感染は確實に戰爭により廣まった。第二に、肺結核を東亜病夫と結びつける言説も、戰爭によりさらに强められた。このことは戰後ひいては今日の肺結核に關する言説とも聯續している。したがって、近代中國の肺結核の問題化を考察するにあたり、日中戰爭期及び戰後の狀況も視野に入れて檢討しなければならないだろう。

第二次上海事變以來、上海の人口は激增し、肺結核の感染狀況も非常に惡化したと言われている。中國防癆協會の業務は戰爭により中斷したが、一九三八年十一月、前駐米全權大使施肇基は國際救濟會宣傳組主任を擔當し、「孤島」となった上海で防癆協會を再編成し、理事長に就任した。また、白利南路三七號に肺結核醫院を設立した。[108]

一九三八年のクリスマスから、上海防癆協會は歐米諸國の例に倣い、防癆シール（Anti-Tuberculosis Christmas Seals）を發行して資金を集めた。[109] 戰時中の上海防癆協會の經費の多くは、寄附金及びバザー用のクリスマス防癆シールによりまかなわれたという。[110]

上海防癆協會の活動に對して、「孤島」上海では様々な反應が見られた。女性雜誌『婦女界』（一九四〇年上海で創刊、一九四一年停刊）には、「嚮應防癆運動」という文章が掲載された。冒頭には、以下のように書かれている。

人生は絶え間ない戰爭である。國際的な軍事戰爭は固よりはっきりしているが、我々の日常生活も常に戰爭中である。最近工部局が物價を制限しているのは、買い占めとの戰爭である。現在我々はまた上海防癆會（ママ）の呼びかけに應じ

て、結核菌と戰わなければならない。[111]

一九三七年から一九三九年にかけては、戰爭のため物資が不足し、印刷業者も少なくなり、肺結核關聯の出版物もほとんどなかったが、一九四〇年から、上海・北平で肺結核に關する書籍が再び現れるようになった。戰時中、國民政府の所在地である重慶でも、肺結核關聯の書籍が出版された。[112]

申東順の研究によれば、一九四〇年代に入って後、上海の雜誌『萬象』は上海市民の肺病問題に大いに注目した。淪陷期の上海において、肺結核は市民たちが直面しなければならない命に關わる問題となった。『萬象』に掲載された文學作品は、肺結核による死に、貧困という現實を反映させただけでなく、死を前にした青年が運命に抵抗し、不合理な時代に抗議することをも隱喩した。敵國に支配された淪陷期の上海では、物資が缺乏したため、青年たちの苦悶は一層激化し、肺病にも罹りやすくなった。これによって、肺結核は青年の鬱と貧困の象徵となったと申は解釋する。[113]

一方、日本軍支配下の北京では、興亞院華北連絡部が作成した日中共同行事表に從い、一九四一年十月二十日から二十六日にかけて、北京特別市衞生局が結核病豫防運動を行い、無料健康診斷を實施した。[114]一九四二年十月十九日から二十四日にかけて、同局は秋季結核豫防運動を開催し、各學校において通俗結核豫防講演を行った。[115]一九四三年五月二十日から二十六日にかけて、春季結核豫防運動を實施した。[116]いずれも日本で展開された結核豫防國民運動[117]と類似したものであり、その延長線上にあったと考えられる。

日中戰爭に勝利した後、防癆は再び政府から個人までの急務となった。戰前によく語られた防癆と救國の結びつきは、防癆と建國・强國と言う形に變わった。

既に抗戰に勝利したが、建國を論ずるには、必ず民族の健康の方面から着手しなければならない。しかし町や公共の場にいる背中が丸くなった人、意氣消沈した人、弱々しい人がどうして皆中國人でないと否定できようか。中國はすでに戰勝國となって、列强の一つと稱されるにも拘らず、なぜそのようにしょげて、そのように虛弱なのか。これ

は非常に重要な問題だ！我々は必ず自尊を保ち、東亜病夫の恥を雪ぎ、中國人が世界各國から輕視されないように、まず民族の健康問題に注意しなければならない！中華民族が衰弱した原因は様々ある。その中で最大の原因の一つは肺結核だ。[18]

一九四七年重慶の防癆歌には、「防癆するのはよいことだ。强國强種に根基あり」（人人防癆人人好、强國强種有根基）[19]という歌詞がある。

また、新たに統計された各地の肺結核感染率・死亡率データも相次いで報告された。例えば、一九四七年、重慶市結核病院醫務主任の王明聚は重慶の結核感染狀況を調査した。X線撮影を利用し、六十八の部門で學生・勞働者・軍警・新聞記者・商人・公務員などを含む合計二萬四三七七人を檢査したところ、肺結核感染率は六・九％であると確認できた。その中で、感染率が一番高いのは勞働者であり、男性の感染率が女性より高かった。「戰時中に結核病の感染狀況は一層深刻になった。その理由は、榮養不良・過勞・過度の混雜・人口移動の激しさなどにほかならない。」「我が國はもともと極めて貧困であるが、戰後にインフレーションが起こり、國民の生活は崩壞寸前である。中級公務員の待遇から言っても、彼らの所得ではほとんど衣食を維持できないので、榮養を考える餘裕はなおさらない」、などの結論を出した。[20]

一方、共產黨系の雜誌『青年雜誌』一九四七年六月二十九日の記事によると、上海防癆協會は、上海學生救濟委員會、上海學聯、ＹＭＣＡ、ＹＷＣＡと聯携して、百箇所の學校の一萬人以上の學生を動員し、街で防癆シールのバザーを行い、「防癆助學」を宣傳した。學生たちは國民黨政府の內戰や獨裁に不滿を抱き、國內の經濟が崩壞したので、多くの優秀な青年が榮養不足によって、肺結核に罹患したと考えた。しかし、新しい中國を建設するにあたり、彼らが重要な役割を果たす必要がある。ここに、防癆助學運動が展開された。[21]

一九四八年一月二十八日、全國各地の防癆協會代表が上海八仙橋青年會に集まって防癆協會代表大會を開き、中國防癆協會の再編成を行った。當時の中國はまさに「東亞病夫」と言うべきであり、人民の健康と民族の生存という問題からい

えば、防癆は重要な意義があるとされた。[122]

同年三月一日、キリスト教系の雑誌『時兆月刊』は防癆特集號を發行し、その部數は合計八萬四千部にのぼった。同じ時期に、上海の中醫陳其昌は「新中醫」という概念を提起し、『新中醫世界』を創刊し、「中醫防癆運動宣言」を發表した。「私が提起した防癆運動は、根本的に中醫の學說を重視するが、西洋醫學を無視するわけではない。これは中國人の防癆運動を指すものであり、外國人の防癆運動ではない。中醫學は理論に優れる一方、西洋醫學は技術を重んじる。故に防癆運動を提唱するのは、まず我々中國人であり、黃色人種であることを忘れてはならない。[123]」また、『肺病根治原理』を中醫防癆運動專刊第一集として出版した。こうした敍述方式は、中醫學廢止論・中西醫學折衷論・中醫學の科學化を强調してきたこれまでの言說と大きく異なっている。[124]これは、戰勝した結果、歐米、日本などの先進國から先進的な醫學知識を受け入れる必要がなくなったためと考えていいだろう。こうしたナショナリズムの擡頭の動きは、中華人民共和國が成立した後にも引き繼がれた。

おわりに

本稿は清末から中華人民共和國成立にかけて、肺結核という病氣が如何に中國人に認識され、また如何に中國の問題とされたのかを分析した。近代以降、細菌學の發展に伴い、肺結核に對して新しい解釋・對策が生み出された。これらの解釋や對策は、後進的な醫學と先進的な醫學を區別する基準となった。清末以降の知識人たちは積極的に西洋や日本の新しい醫學知識を中國で翻譯・紹介し、數多くの通俗醫學書を出版したが、そのうち、肺結核に關するものが重要な部分を占めた。醫療衞生體系がまだ整っていなかった過渡期の近代中國において、丁福保らの翻譯作業は東西諸國の醫學知識を國內に宣傳・定着させることに大きな役割を果たした。これと同時に、上海工部局が共同租界における肺結核の高い死亡率に拂った關心は、肺結核の危險性に對する認識を廣めることにつながった。中國語のチラシ・街頭講說・ＹＭＣＡとの聯

携宣傳などの方式により、肺結核が招いた恐ろしい感染率・死亡率などのデータが徐々に周知され、知識人・醫者・社會活動家・出版業者・廣告業者などに活用された。

南京國民政府時期には、公衆衞生體制の整備とも關わって、肺結核のような高い感染率、死亡率をもたらす疾病を豫防・治療することは、「國族を構築する利器となり」[125]、救國という緊迫感溢れるスローガンと結びついた。また、肺結核を問題化する際に、東亜病夫との因果關係も多々論じられ、それは日中戰爭期及び戰後に引き繼がれた。戰後、知識人や醫者たちは、戰勝國となった中國が、清末以來列强に與えられてきた各種の恥辱をようやく雪ぐことができたが、戰爭により深刻化した肺結核問題を解決できてこそ、東亜病夫の汚名を返上することができると改めて呼びかけた。また、肺結核を豫防・治療する現場で新たに出現した、中醫學の有效性に注目する言論は、清末以來の中醫學廢止論・中西醫學折衷論などとは全く異なり、一種のナショナリズム的な言論であった。中華人民共和國の成立後、長らく特效藥が入手困難であったため、政府は中國の傳統的な醫藥を利用して肺結核を治療することを重視した。前述のようなナショナリズム的な言論はこの流れに合流し、今日までそれが引き繼がれていると考えられる。

一九四八年、上海で中國防癆協會が再開したが、間もなく中華人民共和國の成立に伴い、防癆協會も北京に遷され、中華人民共和國の防癆事業において引き續き大きな役割を果たした。では、中華人民共和國成立後、肺結核に對する豫防・治療は、如何に展開し、肺結核に關する認識は如何に變化していったのか。これらの問題については、別稿に讓りたい。

註

(1) Carol Benedict, *Bubonic Plague in Nineteenth-Century China*, Stanford University Press, 1996. 飯島渉『ペストと近代中國――衞生の「制度化」と社會變容』研文出版、二〇〇〇年。福士由紀「戰時上海的霍亂預防研究」『清以來的疾病、醫療和衞生：以社會文化史爲視角的探索』生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇九年、など。

（2）肺癆は傳統中醫學の言葉であるが、肺結核という譯語が中國に入った後も使われたため、本稿では肺結核・肺癆・肺病などの言葉を特に區別しない。

（3）「肺癆」は記事數三千五百三十七件、廣告數三萬八千六百三十六件、「肺病」は記事數五千九十七件、廣告數三萬二千百九件、「肺結核」は記事數千六百九十四件、廣告數三千三百十五件ある。「ペスト」（鼠疫）は記事數二千六百七十二件、廣告數二千三百一件、「天然痘」（天花）は記事數四千五百九十三件、廣告數九千四百三件、コレラ（霍亂）は記事數七千四百九件、廣告數二萬九千三百三十九件、「猩紅熱」は記事數千十七件、廣告數六百五十五件、腸チフス（傷寒）は記事數四千四百八十件、廣告數二萬三千百十三件、「マラリア」（瘧疾）は記事數二千百九十六件、廣告數は二萬三千四百二十七件ある。なお、「梅毒」の記事は二千五百九十九件あり、「肺癆」「肺病」より少ないが、廣告數は七萬千七百九十六件に達した。

（4）鍾南山・王辰編『心路醫路　呼吸分册』中國協和醫科大學出版社、二〇一一年、一九一頁、など。その他、少年や兒童向けの通俗科學書にもこうした敍述がよく見られ、極めて普遍的な認識であると考えられる。

（5）「楊郁生序」郭人驥『實驗圖解癆病救星』社會衞生叢書編輯部、一九三五年、一頁。

（6）「汪于岡序」・「程樹榛序」・「陳澤民序」・「郭人驥自序」、前掲郭人驥『實驗圖解癆病救星』一六―一七、一九、三一、四一―六〇頁。

（7）「姜振勛序」前掲郭人驥『實驗圖解癆病救星』二八頁。

（8）「郭人驥著 實驗癆病救星 市教局通令採購」『申報』一九三六年十月三日。

（9）Bridie J. Andrews, “Tuberculosis and the Assimilation of Germ Theory in China, 1895–1937,” *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences*, 52 (1), 1997, pp. 114–157.

（10）雷祥麟「衞生爲何不是保衞生命？――民國時期另類的衞生、自我和疾病」李尙仁編『帝國與現代醫學』中華書局、二〇一二年、四三四―四七一頁。

（11）雷祥麟「習慣成四維：新生活運動與肺結核防治中的倫理、家庭與身體」『中央研究院近代史研究所集刊』第七四期、二〇一一年、一三三―一七七頁。

（12）余鳳高「文學中的肺病患者形象」『浙江學刊』一九九一年第五期、一〇一―一〇五頁。陳艷烽「中國現代文學中肺結核的浪漫隱喩與消解」寧波大學碩士論文、二〇〇九年。

（13）前掲 Bridie J. Andrews, “Tuberculosis and the Assimilation of Germ Theory in China, 1895–1937,” pp. 133–134.

（14）陳邦賢『中國醫學史』北京商務印書館、一九五七年、三九八―三九九頁。

（15）王瑞祥編『中國古醫籍書目提要』（中醫古籍出版社、二〇〇九年）八・三・二「風癆臌膈」を參照。

（16）例えば、咸豐七年（一八五八）仁濟醫館が刊行した『內科新說』には「勞症」の項目がある。この本は刊行後まもなく、長崎に輸出され、翌年に江戸在住の蘭方醫三宅艮齋により翻刻・印行された。その後、安政七年（一八六〇）、

京都の平安天香堂もこの本を翻刻・出版した。この一例からも、十九世紀後半、日本で中國から輸入した漢譯西洋醫學書を翻刻することが、西洋醫學知識を受け入れる重要な手段であったことがわかる。井坂淸信「國立國會圖書館所藏の和刻本漢籍概觀」(『參考書誌研究』第四三號、一九九三年、一五頁)を參照。

(17) 前掲 Bridie J. Andrews, "Tuberculosis and the Assimilation of Germ Theory in China, 1895-1937," p. 131.

(18) 岡本武次「醫務 記肺結核可懼之事」『亞東時報』第七號、一八九九年、二〇—二一頁。

(19) 丁福保は光緒二十二年(一八九六)に童子試及び府縣の試驗を受け、十六位の成績で無錫縣學の生員になったという。鄒振環『疏通知譯史』上海人民出版社、二〇一二年、二八五—二八六頁。

(20) 王汎森によれば、印刷物の普及により、社會內部での上昇ルートが多樣化し、科擧の功名がなくても、新しい社會エリートになり得た。王汎森「中國近代思想史研究的若干思考」『思想是生活的一種方式:中國近代思想史的再思考』北京大學出版社、二〇一八年、三六二頁。

(21) 「丁福保『辛丑日記』釋注(上)」上海市檔案館編『上海檔案史料研究(第十三輯)』上海三聯書店、二〇一二年、一九六頁。

(22) 「丁福保『辛丑日記』釋注(下)」上海市檔案館編『上海檔案史料研究(第十四輯)』上海三聯書店、二〇一三年、二八〇頁。

(23) 前掲「丁福保『辛丑日記』釋注(上)」、二〇〇頁。

(24) 丁福保「疇隱居士七十自述(上)」『健康家庭』第四卷第一・二期、一九四三年、一六頁。

(25) 沙曾詒、字は誦先、江陰人。日本早稻田大學卒業、內閣中書、學部七品京官を歷任。民國初年、財政部庫藏司主事・僉事に就任。丁福保と同じく南菁書院出身。趙統『南菁書院志』上海書店、二〇一五年、六〇二頁。

(26) 石神亨著・沙曾詒譯『肺病問答』上海文明書局、光緒二十九年(一九〇三)、卷首。

(27) 一八九七年に丁福保の父が、一八九八年に丁の一番上の姪が、一八九九年に丁の妹が、一九〇〇年に丁の二番目の姪が、いずれも肺結核により亡くなった。『疇隱居士自訂年譜』を參照。丁福保の日記や自傳の中には、家族や同級生らが肺結核により亡くなった記錄が見られる。例えば、「日記選錄」(『中西醫學報』第五卷第三期、一九一四年)などがそうである。

(28) 丁福保『疇隱居士學術史』詁林精舍出版社、一九四九年、一七三頁。

(29) 『中西醫學報』に關する基本情報については、姚遠・王睿・姚樹峰主編『中國近代科技期刊源流(一七九二—一九四九)』(中)(山東教育出版社、二〇〇八年、四八七頁)を參照。

(30) 朱笏云「病床筆記・附肺病新學說」『中西醫學報』一九一一年第十七期、「病床筆記續」『中西醫學報』一九一一年第十九期。

(31) 丁福保譯著『肺癆病救護法』醫學書局、一九二六年、三二―三三頁。

(32) 本文では「肺結核」「結核菌」などの日本新醫學の語彙をそのまま記した。

(33) 丁福保「日記之一斑」『中西醫學報』一九一一年第十一期、十五頁。

(34) 陳邦賢「參觀肺癆病研究會記」『中西醫學報』一九一五年第十二期、三頁。

(35) 『肺病問答』には「世界人口、凡十七億、斃於肺病者、實有二億四千萬或二億八千餘萬之多」（前掲『肺病問答』、一葉表・裏）と書いてある。

(36) 丁福保譯著『肺癆病救護法』醫學書局、一九二六年、卷首。この序文は、一九一一年六月三十日の『申報』にも掲載され、署名には一鶴とある。一九一一年の初版は入手困難のため、ここでは内容がほぼ變わらない一九二六年版を利用する。

(37) 前掲『肺癆病救護法』卷首。

(38) 漁父「新刊批評」『民立報』一九一一年七月五日、四頁。

(39) 高嶋航「「東亞病夫」と近代中國（一八九六―一九四九）」村上衛編『近現代中國における社會經濟制度の再編』京都大學人文科學研究所、二〇一六年、三八五頁。

(40) 芮哲非『古騰堡在上海：中國印刷資本業的發展（一八七六―一九三七）』商務印書館、二〇一四年、一四六頁。

(41) 丁福保「日記之一斑」『中西醫學報』一九一一年第十一期、三―六頁。

(42) 丁福保「日記之一斑」『中西醫學報』一九一三年第十二期、十三頁。

(43) 丁福保「日記之一斑」『中西醫學報』一九一一年第十一期、一頁。

(44) 胡貽穀・王菩生「中華基督教青年會全國協會書報部主任幹事謝公洪賚傳」『青年』第十九卷第七期、一九一六年、二四〇頁。

(45) 『申報』一九一九年十一月一日廣告「敬送『免癆神方』」。また、「贈送『免癆神方』」『中華醫學雜誌』第五卷第四期、一九一九年、一五一頁、など。

(46) 例えば、丁福保はかつて「丁製半夏消痰丸」「精製補血丸」を製造したことがあり、南洋勸業會超等獎を受賞した。『中西醫學報』第十期、一九一一年、十四頁。

(47) 例えば、張汝偉は「論喜笑與病理之利益」（『紹興醫藥學報』第五八期、一九一六年、二七頁）で『肺癆病之天然療法』を引用している。また、『恨海孤舟記』第二十六回「雙宿雙飛鷫鸘鰈鰈千山千水風風雨雨」が丁氏醫學叢書に言及している。「……最奇怪的、他近來買了部丁福保的『醫學叢書』、鎮日價翻閱那血症一門。」（『小說畫報』第十六期、一九一八年、七頁）を參照。

(48) 梁啓超「中國歷史上革命之研究」（『新民叢報』第四六―四八號合本、一九〇四年二月十四日、一二四頁）『飲冰室文集』十五、三七頁、『飲冰室合集』第一冊、中華書局、一九八九年。この部分は、吳文聰譯『社會統計學』（早稻田叢書、東京專門學校出版部、一九〇〇年、二六四頁）に

よっている。同書の原著は Richmond Mayo-Smith, *Science of Statistics : Statistics and Sociology* (Macmillan and Company, 1895) である。

(49) 李恒俊は上海工部局衛生處の年度報告に基づき肺結核死亡率を整理したが、數字に關しては若干の間違いがある。實は日中戰爭期においても工部局は租界の結核死亡者數のデータを統計していたが、戰時中の人口數を把握しづらいことから、圖一の肺結核死亡率は一九三七年までしか算出されていない。李恒俊「疾病知識、醫療文化與衛生現代性：近代中國肺結核病的社會與文化史（一八五〇－一九四〇年代）」新加坡國立大學中文系博士論文、二〇一四年。

(50) "Health Officer's Report," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1895, pp. 91–118.

(51) "Health Officer's Report," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1901, pp. 122–123.

(52) "Health Officer's Report," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1903, p. 84.

(53) "Health Officer's Report," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1906, p. 141.

(54) 「一千九百五年上海工部局之年報譯略」『萬國公報』第二〇七期、萬國公報社、一九〇六年、二一－二二頁。

(55) 葆龢「肺癆預防與社會改良之關係」『進步』第十一卷第二號、一九一六年十二月、一頁、など。

(56) *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1915, p. 78A. チラシには、以下の六條がある：「㈠上海病症、以肺癆爲最厲。㈡係傳染之病、亦可免之。㈢初起、大半係由呼吸、將微生物吸入人身、該微生物係含於患病者痰內、或言談噴嚏。㈣微生物係由患肺癆者發生、其痰內不可以數計。㈤混雜吐痰、最爲不潔習慣、患癆症者、無論何處、除置水或藥水之痰盂、或火爐陰溝之外、一概不應吐痰。㈥患癆症者、不應對人咳嗽。」

(57) 例えば、『中華醫學報』一九一四年第十六期、五〇頁。

(58) 例えば、『申報』一九二二年五月十日。

(59) 圖一によれば、肺結核死亡率は一九〇二年にピークに達し、その後は低下傾向にあるが、歐米諸國と比べればやはり深刻な狀況であると考えられる。

(60) "Health Officer's Report," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1907, p. 65.

(61) 兪鳳賓「演說：肺癆病之簡易豫防方法」『學生會會報』第五期、一九一五年九月、一六頁。『申報』（一九一五年六月二十六日）にも報道された。ただ計算にはやや不正確な部分があり、各處に引用されたデータにも若干差違がある。

(62) 「演說豫防肺癆之方法」『申報』一九一五年六月二十四日。

(63) 『申報』一九一五年七月九日の廣告。

(64) 『申報』一九一五年十二月二十一日の廣告。

(65) 伍連德、Wu Lien-teh、一八七九－一九六〇年、マレーシア生まれの華人。一八九六－一八九九年にエマニュエル大學に留學、一九〇二－一九〇三年にリバプール熱帶醫學研究所などで實習を行った。のちクアラルンプール醫學研究院で熱帶病について研究した。一九一〇年から一九一一

年にかけて、中國東北地域で肺ペストが流行した際に、東三省ペスト防疫處總辦に任ぜられた。一九一五年、中華醫學會を發足させ、翌年會長に任命された。一九三〇年上海全國海港檢疫管理處處長などに任ぜられ、第二次上海事變後にマレーシアに戻った。王哲「伍連德年譜」（王哲『國士無雙伍連德』福建教育出版社、二〇一一年、二九〇－二九三頁）を參照。

(66) 兪鳳賓「中華醫學會第一次大會記」『中華醫學會雜誌』第二卷第一期、一九一六年、三七頁。

(67) "Report of Commissioner of Public Health," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1923, p. 100.

(68) "Report of Commissioner of Public Health," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1924, p. 119.

(69) "Report of Commissioner of Public Health," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1924, p. 138.

(70) "Report of Commissioner of Public Health," *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1924, p. 171.

(71) "Salaries Commission", *Annual Report of the Shanghai Municipal Council*, 1930, pp. 328-329.『上海公共租界工部局年報』上海公共租界工部局、一九三〇年、二九二頁。

(72) 「范守淵序」前掲郭人驥『實驗圖解癆病救星』五頁。

(73) 前掲 Bridie J. Andrews, *Tuberculosis and the Assimilation of Germ Theory in China,1895-1937*, pp. 136–137.

(74) 張志偉『基督化與世俗化的掙扎 ―― 上海基督教青年會研究（一九〇〇－一九二二）』臺大出版中心、二〇一〇年、一七二頁。

(75) 「醫學展覽會」『上海青年』增刊第一號、一九一五年一月、四頁。

(76) 「衛生展覽會中驚人之陳列品（寫眞四枚）」（『青年』第十八卷第九號、一九一五年十二月）を參照。また、陳邦賢「參觀肺癆病研究會記」（『中西醫學報』一九一五年第十二期、一－二頁）にも展覽會の様子が詳しく紹介された。

(77) 范源廉（一八七四－一九二七）、湖南長沙生れ、清末民初の教育者・政治家。清末の變法派の一員として活動し、北京政府で教育總長を務めた。一九二三年に北京師範大學校長に就任した。彼の名前について、多くは「范源濂」と表記されるが、彼の自筆署名には「范源廉」のほうが多く見られる。徐一士「閱讀『文史資料選輯』的管見〔校訂和補充〕」『文史資料選輯』合訂本第十卷、總第三一－三二輯、一九三頁。

(78) 范源廉「我們眞願作病弱的國民嗎」『北京師大週刊』一九二四年六月十五日。

(79) John H. Korns, "Incidence of Tuberculosis Infection in China," *The China Medical Journal*, 1925, p. 10.

(80) John H. Korns, "Tuberculosis," *Addresses and Papers, Dedication Ceremonies and Medical Conference*, Peking Union Medical College, September 1921, pp. 278-280.

(81) 前掲 John H. Korns, "Incidence of Tuberculosis Infection in China," pp. 15–16.

(82) 前掲高嶋航「「東亞病夫」と近代中國（一八九六－一九

四九）」四〇九頁。

(83) 「死亡調査證的塡寫方法」『南京衞生』第一卷第二期、一九三六年十一月、一〇頁。

(84) 一九二八年、南京國民政府は衞生部を設立したが、一九三〇年に廢止された。一九三一年に內務部の下に衞生署を設置するが、職務の範圍はかなり縮小された。華璋（John R. Watt）著・葉南譯『懸壺濟亂世：醫療改革者如何於戰亂與疫情中建立起中國現代醫療衞生體系（一九二八－一九四五）』復旦大學出版社、二〇一五年、三〇頁。

(85) 張君俊「「從民族復興運動」說到『防癆運動』」『防癆』第一卷、一九三四年創刊號、三－五頁。

(86) 「本會成立經過」『防癆』第一卷、一九三四年創刊號、二三頁。

(87) 「上海市中心區建設之起點與意義」『申報』一九三三年十月十日。

(88) 中國防癆協會編『防癆救國　中國防癆協會第三屆徵募大會特刊』中國防癆協會刊、一九三六年、二二－二三頁。

(89) 前掲『防癆救國　中國防癆協會第三屆徵募大會特刊』一六－一七頁。

(90) 「南京舉行防癆展覽會」『南京衞生』第一卷第七期、一九三七年、四一－四二頁。

(91) 顏福慶「中國防癆協會三年來工作概況及今後計劃」『申報』一九三六年十一月十七日。

(92) 朱笏云「論結核菌之流毒及其防遏法」『中西醫學報』一九一二年第二十期、一〇頁。

(93) 盧永春「癆病論」『防癆雜誌』第一卷第四期、一九三五年、一八四－一八五頁。

(94) 前掲郭人驥『實驗圖解癆病救星』二頁。

(95) 前掲高嶋航「「東亞病夫」と近代中國（一八九六－一九四九）」四〇九頁。前掲雷祥麟「習慣成四維」一五六頁。

(96) 愚公「名副其實的東方病夫」『互助』第一卷第六期、一九三四年、一三九頁。

(97) 「聖瑪利亞女校請李兆璋演講防癆問題」『光華醫藥雜誌』第三卷第十二期、一九三六年、六一頁。

(98) 「李兆璋蒞校講『防癆問題』」『大夏週報』第十三卷第十三期、一九三六年、二七二頁。

(99) 李兆璋「防癆演講」『振華季刊』第十五期、一九三七年、四八頁。

(100) 前掲李兆璋「防癆演講」四九頁。

(101) 前掲「聖瑪利亞女校請李兆璋演講防癆問題」六二頁。

(102) 余雲岫「癆病救星」『新醫藥雜誌』第四卷第四期、一九三六年、三二三頁。

(103) 高士其については、浦漫汀「高士其傳略」（『高士其全集』五、航空工業出版社、二〇〇五年、附錄）を參照。

(104) 高士其「寄給肺癆病貧苦大衆的一封信」『讀書生活』第二卷第八期、一九三五年、三五〇－三五一頁。

(105) 前掲浦漫汀「高士其傳略」を參照。

(106) 戴志澄等主編『中國防癆史』（人民衞生出版、二〇一三年）の第二章・第三章を參照。

(107) 徐建偉・楊祥銀「防癆救國：中國防癆協會的成立及早期

活動（一九三三―一九三七）」『溫州史學論叢』第二輯、二〇一二年、二八一―二九三頁、など。

(108) 「上海防癆協會近訊」『申報』一九三九年一月三十一日。

(109) 「防癆會售防癆花簽」『申報』一九三八年十一月二十日。防癆シールはクリスマス・カードに貼るシールであり、一九〇三年にデンマークで當時全世界で死亡原因の上位にあった肺結核を撲滅・豫防する慈善募金運動から始まった。

(110) 陳湘泉「回憶上海防癆協會」『中國防癆史料』第一輯、中國防癆協會、一九八三年、五五頁。

(111) 揮桴「響應防癆運動」『婦女界』第四卷第二期、一九四一年、五一頁。

(112) 北京圖書館編『民國時期總書目：一九一一―一九四九（自然科學・醫藥衛生）』「結核病」（書目文獻出版社、一九九五年、五一九―五二三頁）を參照。

(113) 申東順『在「說」與「不說」之間：上海淪陷雜誌『萬象』研究』中國傳媒大學出版社、二〇一二年、二五六―二五九頁。

(114) 侯毓汶「通知飯莊同業理髮職業爲定期舉辦肺結核病預防運動仰飭同業人員踴躍參加由」『市政公報』第一三九期、一九四一年十月、三頁。

(115) 侯毓汶「訓令各衛生區事務所爲令飭在秋季結合預防運動期內酌派醫師等分往轄區內各學校作通俗防癆講演並列表報局備查由」『市政公報』第一七六期、一九四二年、一頁。

(116) 「呈市公署 爲舉辦春季結核病預防運動檢同實施方案請鑒核示遵由」『政府公報』第一九五期、一九四三年、二頁。

(117) 內務省衛生局「結核豫防國民運動に就いて」『官報』一九三六年十月七日、一―二頁。

(118) 楊郁生「民族健康第一聲――防癆」『浙江衛生』第六卷第一期、一九四六年、八頁。

(119) 健人「防癆歌」『衛生月報』（重慶）第一期、一九四七年四月五日。

(120) 王明聚「重慶肺結核檢査報告」『中華醫學報』第三三卷第九〇期、一九四七年、二八七頁。

(121) 小草「唱出一個春天來――記防癆助學運動的慶功大會」『青年知識（重慶）』第三三卷第五・六期、一九四七年、一八―一九頁。

(122) 「中國防癆協會成立經過」『防癆通訊』第一卷第一期、一九四八年、二―三頁。

(123) 陳其昌「發起中醫防癆運動宣言」『新中醫世界』創刊號、一九四八年、一四―一七頁。

(124) 清末以降、中醫學廢止論・中西醫學折衷論・中醫學の科學化などの論說は長期にわたり存在していた。清末の中醫學者の議論には西洋醫學に對する誤解や批判が多かったが、時代が移るとともに、中國人の西洋文化を學び取ろうとする熱意が高まり、西洋醫學が急速に中國に受け入れられるようになった。北京政府時期及び南京國民政府時期に至ると、中醫學を廢止すべしという論調が主流となった。これに對し、中西醫學折衷論・中醫學の科學化といった比較的穩健な立場を取る議論も生み出された。つまり、中醫學に近代化や科學化といった要素を加えることで、中醫學に新

たな活路を求めようとしたのである。中國科學技術協會編『中國中醫藥學科史』中國科學技術出版社、二〇一四年、一〇四―一一二頁。

(125) 前掲雷祥麟「習慣成四維」三九五頁。

THE PROBLEMATIZATION OF TUBERCULOSIS IN MODERN CHINA

QU Yandan

This paper analyzes how tuberculosis was recognized by the Chinese people from the late Qing Dynasty to the founding of the People's Republic of China, and how it came to be regarded as a problem. Specifically, two questions have been addressed : first, how the infection and mortality rates of tuberculosis were widely known by the public in modern China ; and second, how tuberculosis was associated with the phrase "Sick Man of East Asia" (*Dongyabingfu* 東亞病夫).

In modern China, when the medical system was still incompletely developed, the translation work of Ding Fubao (丁福保) and others played a very important role in the propagation and acceptance of medical knowledge from Japan and the West. At about the same time, the Shanghai Municipal Council's concern about the high mortality rate of tuberculosis in the public concession also led to the recognition of the risk of tuberculosis. Through leaflets in Chinese, street speeches, and cooperative publicity with the YMCA, the terrifying data on infections and mortality caused by tuberculosis gradually became known to the Chinese, and knowledge of tuberculosis was also used by intellectuals, doctors, social activists, publishers, advertisers and others.

With the initial establishment of the public health system during the period of the Nanjing National Government, prevention and treatment of tuberculosis with its high rates of infection and mortality was linked with the emotional slogan urging the salvatiion of the country. In addition, in the problematizing of tuberculosis, the causal link between tuberculosis and being the "Sick Man of East Asia" was often brought up during and after the Sino-Japanese War. After China became a victorious nation, it was thought that it could wash away the various humiliations that had been imposed by foreign powers since the end of the Qing Dynasty. Intellectuals and doctors called on the people, arguing that the only way to solve the tuberculosis problem, which had become more serious due to the war, was to cleanse the shame of being the "Sick Man of East Asia."

This series of explanations and understanding about tuberculosis will not only help us to understand the concept of medical culture in modern China, but also provide us a new perspective for research on the socio-medical and cultural history of modern China.